# 茶道筌蹄 一

456

踈々斎主人編

# 茶道筌蹄

玉茗書房合梓

〇茶道筌蹄　題字

如之要茶

前龍峰寓宦野叟書

名にたかき
宇治の川みつ
くみとりて
こゝろをすまし
あちはひそよき

従一位實枝

# 茶道筌蹄巻之一

目録


和漢茶之濫觴
茶會　同節序
點茶茶　爐　風炉
相傳物
小座舗
　床類
　釣棚
　柱類


宗雨

庭之記
門小道具
水遣付道具
棚物
七事
茶師
茶名



○和漢茶之濫觴

夫茶は隠士の玩弄にして風雅礼式を専とせず中華まそ其初は江南の人陸羽茶を喫事を知て江南の人是を見て次第唐の開元年中に至て泰山霊巌寺の和尚寺中に坐禅をなす僧侶をして茶を喫しめ睡眠を除かしむ是よりして普く茶を喫事を知れどもいまだ茶の礼式定らず次唐の陸羽に至て始て茶礼を定め（陸羽字は鴻漸桑苧翁と号し或は竟陵子又東岡子と号す）茶経をつくりし茶の功能をあらはし茶具廿四を造りしより遠追慕せり御史李季卿といふ人陸羽が茶をのむを

ゆゑ是をさかせて紙錢ハ陸羽か為に茶礼を
以て自茶を点じて是をすゝむ茶更年にて李
卿錢二十文を以て是れに酬也と本傳に見へたり
今日本にて茶道を自る人口切と号して新茶を以て茶会を催すとき茶礼と号して分限に余る金銀を送ることを行り是茶会の
が故事にもとづく之　又陸羽建安に行りし紀山水の画軸を
壁間に懸ある古琴一張と側に置き茶を嗜ミ風雅を
専とし茶製法を定め茶櫃蔽茗舛の五種に
分つ唐より宋に至て茶をさかし世こと甚し
然れども日本の如く侘と名づけて富貴の人と
いへども倹約を専とせる風雅の式法ありしを行バ
たゞ味と色とを求し紙論どもなかりし又



日本にて茶の権輿は上古より茶の来らさりしといへども
人しられと開出れて紙志けり
桓武帝の御宇に傳教大師入唐して後歸の時茶の
実をもち帰りて是を江州坂本に植しと日吉の社
記に見へたりとなり
平城帝の大同元年に弘法大師唐より帰朝乃とき
茶をもち帰り弘仁年中に至て
嵯峨帝に献ぜしともいへり又東鑑に建保二年建仁寺
の栄西禅師宋より帰朝のとき茶の種を持来りて
筑前博多に栽て後鎌倉に献じ實朝公此茶を喫
して頭痛の病を除くといへり其後明恵上人博多

の茶を梅の尾に移し栽(ウヘ)て或ハ蒸(ム)し或ハ焙(バイ)するの
製法を伝受して甚だ茶を愛れ是よりして貴賤
茶の雅趣(ガシユ)に行れてなお志ありてこれを賞翫(シヤウクハン)れと思へくら
かくれもなく説てまくしを一定し難しといへども
日本紀に引茶の節会(セチヱ)といふことを行れる
我朝にも上古(ムカシ)より茶を行ひしと見えて其より後
ども当世のごとくに茶会など設(マウケ)て式法を定め古器珍
玩(グハン)を弄(モテアソ)ぶ様なるなりし事ハ東山殿のときに珠光茶
道式法を定め珍器を翫(モテアソ)ぶ継て紹鴎利休等は道中
興の祖となりしより世間普(アマネ)く賞翫し茶道盛(サカ)む
なり行けれ



## ○茶会

往昔(ムカシ)ハ茶会(チヤヱ)となり太平記に佐々木道誉など
茶会を催れしといふ事ありし紹鴎利休居士の時代
なりしも茶の湯(ユ)と称し茶(チヤ)の湯を仏家にて奠茶(テンチヤ)
奠湯(テントウ)を略して茶湯(チヤトウ)といふ居士是に混(コン)ぜられ
なりけり茶の湯とハなりしとぞ

## 昼

利休居士の時代までハ二食なりし己の刻れと昼飯と
云ひ晡時を夕飯といふ夫故昼の茶の湯といへバ己の刻時分と
いふ当時一日に三食なる故へ昼の茶といふ六午時のつもりなれ

## 夜咄

むかしハ晡時より露地入せし故中立に露地小坐敷
ともに火を入まれし昼夜咄ともいひけし への支まて当時ハ

夜咄も暮六ッ時に露地入すべし　但し客入ありて席をせばめり 茶菓出し終りて席の

## 朝

いさし水を張
食事出ス
六ッ時と五ッ時なり客六ッ半に来る時ハ炉風呂とも釜
前に炭をおさめし釜に水を加ふ是ハ既に六ッ時におゐて
釜は仕懸し下火のまゝになる故也五ッ時に来るときハ
炉風呂とも昼の茶湯に准ずべし

## 暁

七ッ時に露地入するなり出時ハ七ッ半なり
前日黄昏に露地へ水を打燈籠灰詰合の燭まで火を
入置しして火を消し暁七ッ時に燈火入るゝ故人の云
通宵(トウセウ)燈有り消したるまゝにて少しの火をともされバ
趣を失ふ中も一入風情あるよし然釜ハ前夜より仕



懸置客待合へ来ると炭を直し二ッ加へ手水鉢の水を
改(アラタ)め迎に入なり後法生姜(セウガ)酒ぜんざい餅など種の物を
出し薄茶を緩(ユル)く点て宗旦ハ後薄茶滴て底を取
釜ハ勝手へ持出て水を仕かけ湯濡(ヌレ)釜にてかける故扱釜
扨此釜ハ用ひ志し水をこふし仕かけるとこる
直に下を少し焼しかしげれバ水を仕かけるがよし　猪炭
に薄茶にて膳出し時実上(ゲ)と明けて燈引(キ)後も
そのしと明るが至極の時刻なれども餘りに夜ケ又キ
合とセんとなるゝをよろしからず膳出し席も
晴がまじバ行燈を引に及ぶしと引べし揚ある
座中その晴ぐ行るハ膳出しに汁(シル)ハ何もなくて六ケ敷と

亭主より名高るもさびて面白し小間にて突上ゲ
窓の下へよりかゝる時ハ末座へたよるべし突上ゲある
席ハ連子の戸を障子と仕替る事も客人をのぞくも
よろし 猶中立中すぐハ隠かなるべしとなるべし中
立後ハ隠かさらりとなれべし 客もはやく紀年と
とくもよし

**飯後** 菓子茶とも云 朝飯後ハ五ツ半時昼飯後ハ九ツ半より
いづれも菓子の茶也朝飯後ハ正午の茶会の朝席より
外ならぬ昼飯後ハ夜ばなしの朝席よりあらぬ
ゆゑ客の心得肝要之

**不時** 兼約なしに若かりて催し申人道具万端なき



荒ゆるしあり

**跡見** 跡見ハ朝茶正午の後より限る夜咄よハ跡見なし
客より近辺ゆゑすぐ来り何方まで此安茶内をねがふ亭主
方へ申入るべし亭主朝茶午時の茶海にて茶花を残し
其跡の茶ハ初めの客ニ花不足しなるも宜し 客方へ案内をなれ客をむ案内に従ひ
露地へ入れ亭主炭代一ツ二ツ置添なく炉中とまる置
よるし 但し火末落ち釜もよく亭なる手ハ其ままそも宜し 猪水さしの茶入袋とも
よる茶器をかざりはなして水指の水とこぼしたる迎に
出る但し露地へ水をまれ客座よりほくと亭主
茶碗と猿の間より直ちに口明如例挨拶して出
に点茶仕べし 客ハ茶入茶杓とかへしし一礼しく

退出となり支度有て急なる事も折ふし時ハ濃茶
のみにて炭なとなし菓子を出し薄茶ハ点るもよし
菓子をはじめに待合に出しおくもよし元来
初見の趣意ハ遠方へ旅立とすれハ日限急にせまりの折から
用事繁くして半日の閑を得る事もあるまじき折より
何とぞ此度の催ありし洩る事の残念さよと客方より
申こす事故誠ありて火急なる場合なれバたのしむ出也
なれバ主客とも心得べき事也

## 獨客

客待合に纓をかくるも中央より下へさがるべく
席にても同様也主人の心得ハ客の淋しくなき様に
もてなしを肝要とし主人の座ハ茶点置の末席なり



座敷の勝手より通ひ口見はからひ之し料理ハ膳を客へ進
めて我の膳を持出し相伴するべし其後ハ通ひ用ゆる例
のごとし 給通ひ飯器石鍋を引とりて主菜物の椀
を載膳へ乗せ勝手へ持行勝手にて吸物をお給仕するな
あり又吸物中でお給仕して吸物椀を膳に乗せ勝手へ
持行湯を通ひに出さするもよし 給通ひ吸物を引付
勝手へ入る時亭主間鍋ハ才持出るもよし 通ひ盃を
納め勝手に入るとき亭主吸物椀を膳へ乗せ勝手へ
持入湯を勝手よりしてお給仕し客の膳を下ぐるもよし
点茶の前客より清手茶も召上られ候ふなど挨拶
すべし時ハ二人分の茶を点るべく客より右の挨拶なき時ハ

亭主より濃茶仕廻しといひて二人分の茶を点
じ濃茶を一礼して茶碗呑むと亭主正客の
半東の世話にて座ぼく之あさく小盆載おすらハ少し茶碗
進めてもよし茶碗ハ手より手へ受取帛紗(フクサ)どをづ
して呑む客一礼をすれバ茶碗ハ客の前にあつる帛紗
とさげ定座に納る

○月節序

大福　正月元日より十五日までの茶をいふ

春　正月十五日以後を春茶といへ

風炉　暁夜咄ハ夜し七つ時までは釜仕舞ふ事

名残　古茶の名残といふ又風炉の名残といふなりき



行ハ八月末より九月へかけて催ハ

口切　九月の末より催ハ当年新茶の口切之

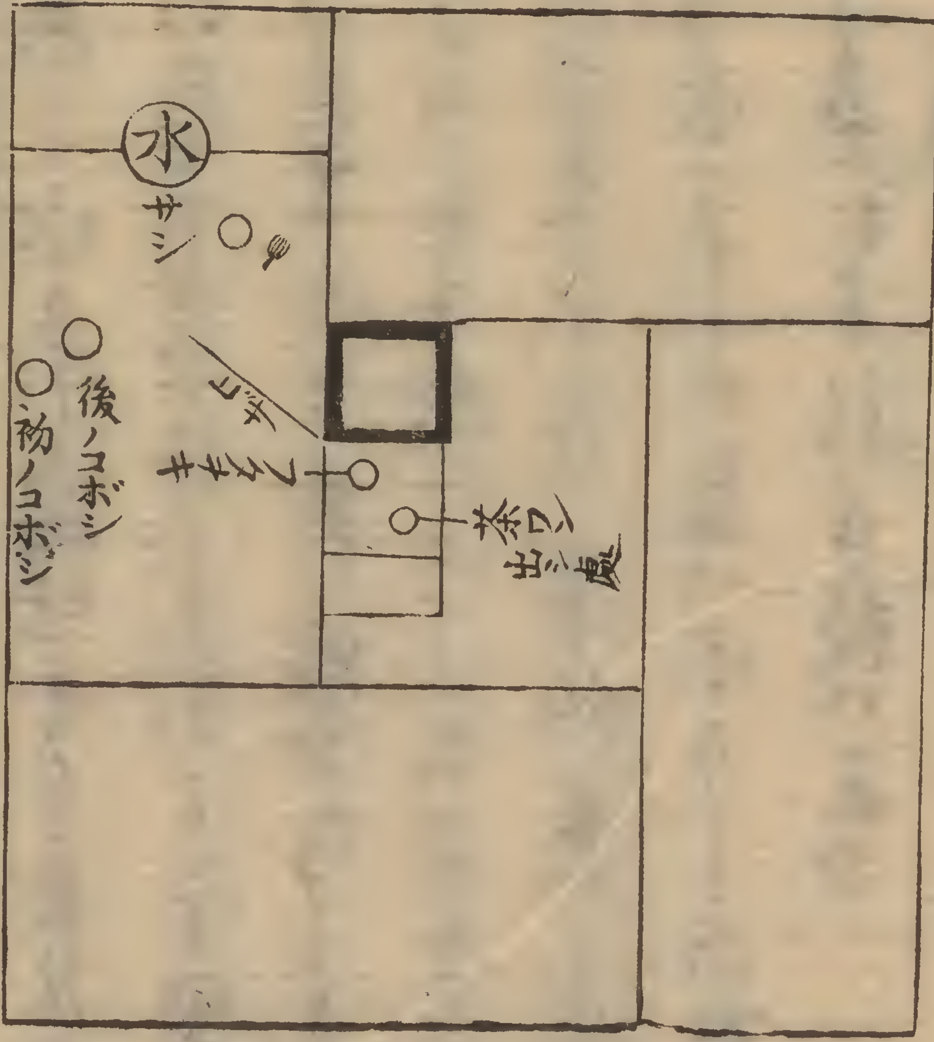
○點茶点

田舎半点　水さしの向ふ畳中の真中かゝり左右ハ畳中
の真中より少し客付へよる係し大きづりある水指ハ畳
真ベしいづれも炉縁の外つらより水指の前かまでハすま
あるあいまに茶付る茶器茶碗の置合の目四ツ置きし
との置合茶ぶんへ向てる茶杓の先水さしよりハ分
行く程に並付く茶器茶筅を流しハ炉縁の角筋に
して炉縁の角と水さしとの真中と茶器茶筅の
置のまゝとる茶器茶筅の置合の目四ツある居前ハ

炉縁の角とまつよとられ蓋置と茶入と代両様の目どをり
すまり釜の蓋ねれるにおし居前の上る程てもまりぬべし
又其人の長短によつて前へ進むと後へよるとはあるべし
建水初め置炉のすじぎりに置れ点前にかゝれとれ
炉縁のすじと建水の志つに当る也つよ持ふ逆ん蓋置ハ
置の目一ッ五すもち上の蓋置ハとれにつらふカキタテ
環ハとりまる故向へまいられ大蓋ハ向へまいられによおよぶ沢
環のるく茶巾とのせるまさつるさる也へあり茶碗出し柄杓
炉の右乃かゝる置て代炉程とはじめ其半割の志ありて
環付の通り杉置炉縁の内つる三ッ割一ッかと居前の
通りまり引く



○古流点前の志中水さしの志ハ大小よかゝりはば
茶器茶碗ハ炉縁左の角と水指との筋へ茶入乃
真中とおもさ蓋置ハ置の縁の内杉ハ手前のよ引
釜へ寄る故ハまい出すよ引 居前ハおし向へ寄る



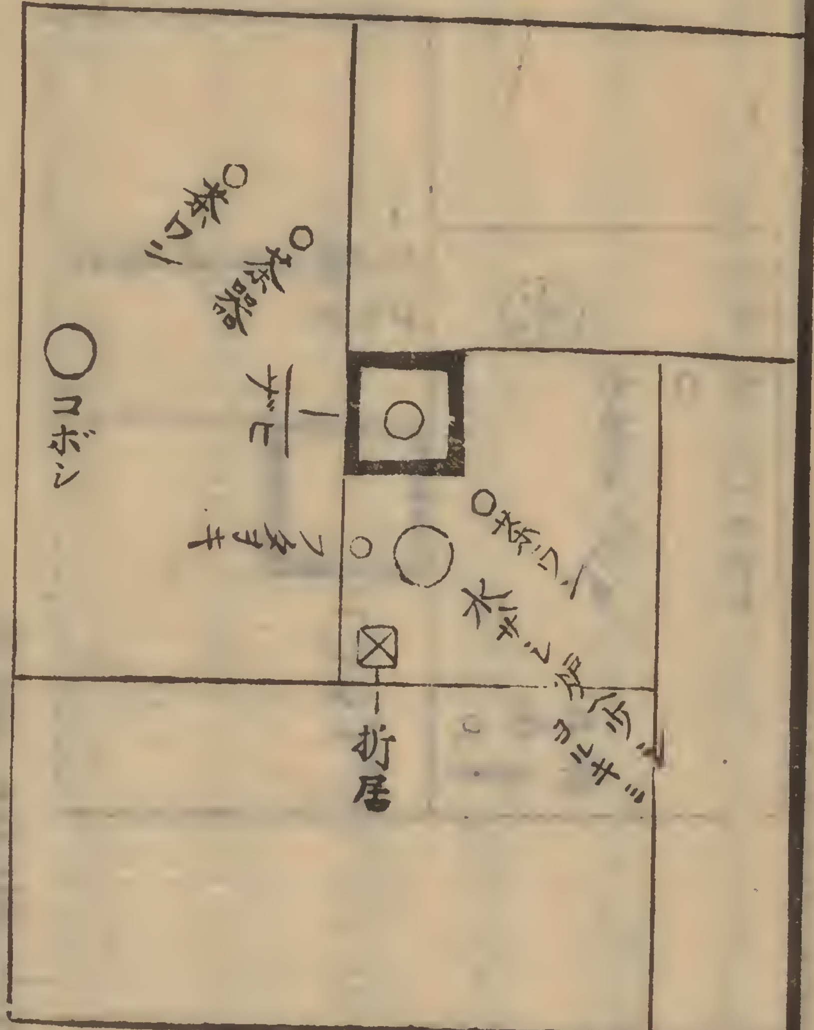
四畳半流点　水さし図のごとく壷付る茶碗茶まん初
より流れ居茶四畳半手茶と釜のまへの右囲ゐを
炉ニ向ふ手まへすべフタ壷ハ縁をはしろく水さしの前へ
大蓋畳へりより内へ一行しらふ茶まん畳香合出し
茶入出し濃茶のうへハ帛紗茶まんのまへ建水四畳
半の通り水さしの蓋ハ水さしの右へハじきを外へ
ましてよせかけれ手数ハ二ツ

一
へ
三　二

此手茶濃茶ノハ
ちかまぶれく

茶月の折居る茶碗とすじかれ

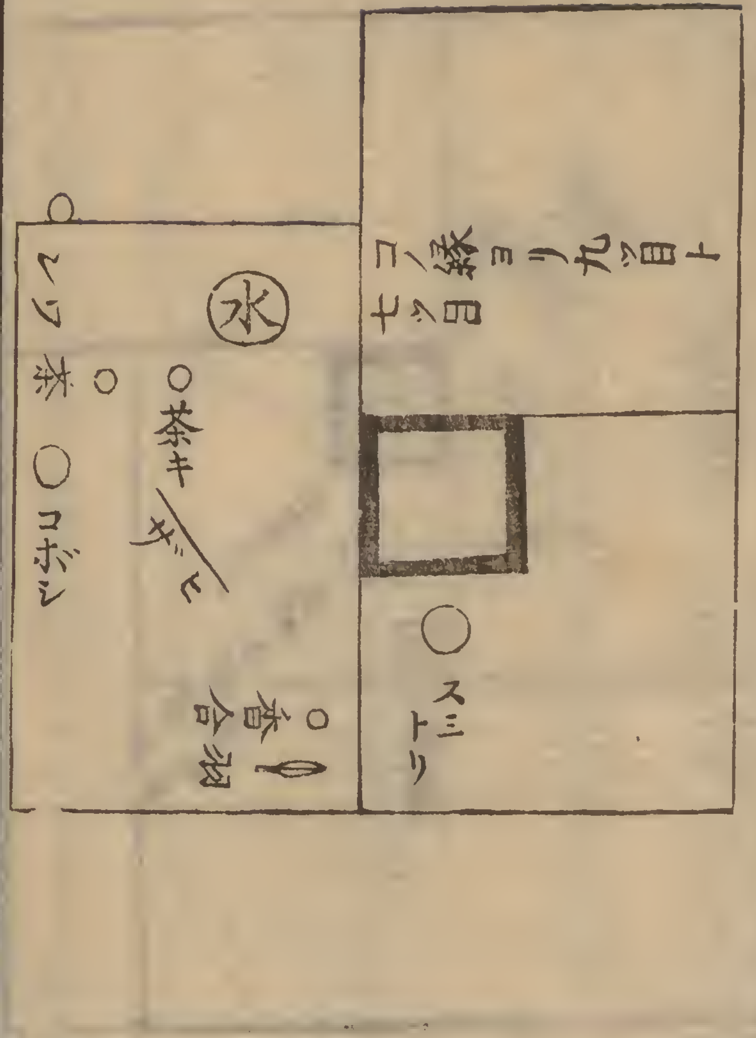
四畳半左手茶　居茶ハ臺目茶入の蓋をならべて茶まんの
茶入ハれ釜の蓋帛紗ニてふれ因ハ其フクサ建水のむかふま
畳ふかくかむる杓と左の手へ渡し帛紗と右の手まく
れすぐに蓋をとるく後建水のうしろよむべし



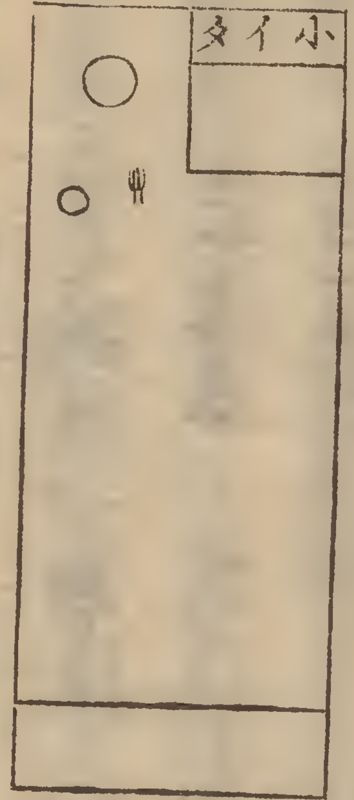
臺目　曲水さしハ客付の方乃畳のへりより九ツ目約瓶ハ

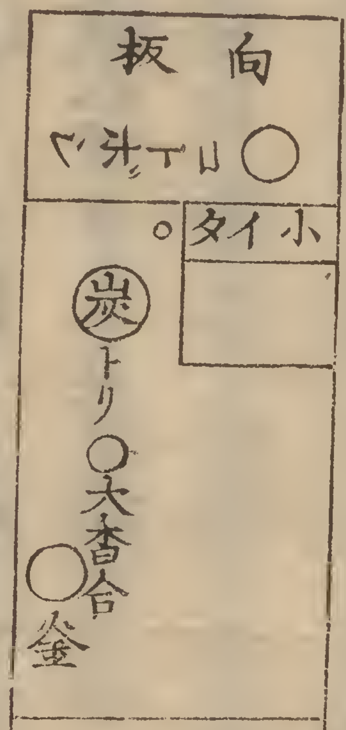
七ヶ目此割合まて除の水指他器すべし炉縁の外筋と
筋とのまつま座く居所ハ三角茶器茶碗ハ眉中の真直の
目四ッ両方へ開く扨引寄りハ炉縁の外四ッ割一ッ分
炭手前ハ羽箒香合も添て差し置く此羽箒の座
寄りハ真の手前なり

但し此墨子長板等
羽箒真座よきもよし

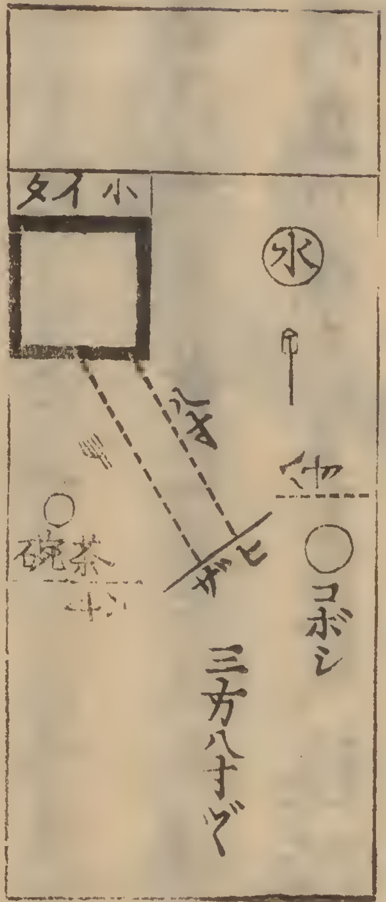



向切　水指ハ釜の鐶付の通りよりすこし先へよせ茶筅と
茶器よりすこしはなして置茶器と筋違て炭手前座を金銭
炉縁よりハ寸撥手の方へ引付手燭ハ向板の上へ炉の並ハ
すり置く向板なき時ハ香合座不よ座し其入合小なれバ
小板の並まて座大なれバ炭とりの前に置べく
但し向板なきときハ紀座を小板二寸二分座を六尺五寸の
寸法ハ六尺二寸の座をまてハ小板一寸八分



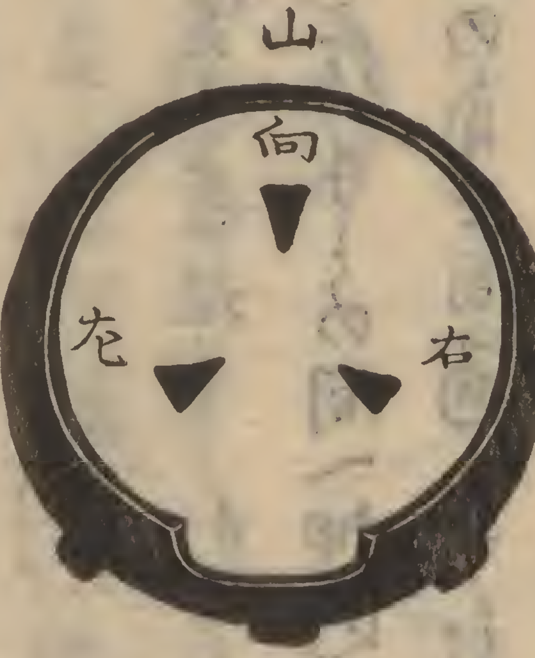
向切左手茶　右手茶のうち返しにて組し茶器茶碗茶筅
と並べ置て柄杓ハ筋違に引茶器フタをとり茶碗の前
向切左手茶流点　右のごとく水さし茶器茶碗と並付置
建水に柄杓蓋置仕込ながら側の所に置き様をとりて炉の方へ
向ふ此様図のごとく三方とも同し明さに出し左はじめ
蓋置へ柄杓を引れ茶器茶碗共のごとく居前へとり出し
帛紗にて浄め図のごとく左の畳の縁一寸ほどありて茶器置
置き茶筅を茶器よりおろし炉の方へよせ斜に置き付柄杓を
とり左へ渡し蓋置を建水より取出し右の手にうけて
多柄の末を置き釜の蓋をとり蓋置の上へ掛き茶を点て
夏常のごとし　仕上ハ茶筅を戻して茶碗を茶器乃
跡に並べし水を張りて蓋を釜へ仕舞ひフタを置きこぼし乃
後の方へ置き柄杓を建水にかけ茶碗茶器とりて左乃手有
渡し右の手にて茶器をとり様をとりて水さしの前有
元のごとく順に建水より引く




隅炉　茶手前本勝手の風炉のごとし　炭手前乃節客
座辺へ寄つまく拝見せし組し添炭置ける間ヌ有てすすぎし
左右に置き非勝手なるべし
風炉釜付様并灰仕様　風炉釜付様ハ甚だしくハ向より六寸

九毛ハむかしハ八すなりしが今ハ七すに定む一方半より
なく小間中間にて一寸実込ハ九ッ目十一目大板ハ三ッ目九板ハ
五ッ目いづれも毛の客付すて合ス 但し大板一尺口寸口方なり 抜蓋乱残りすり長茶の
とも板の上ハ横ニ引く 灰をかけて毛先(マグ)風呂縁よりすてさき五徳も
毛無にて居へて風呂縁おし客付へすじをらして灰縁
なりて客付の灰を見込の方乃五徳の爪の外つらと並べ
見付の方乃爪ハ灰をよふりて 琉球風呂土風呂毛て
押切灰二文字雲龍風呂其余土風呂又なふところ挾ミ
二文字蒔(マキ)灰ハ鉄風呂ハ押切かき上(ゲ)なり
風呂灰の名所 風呂に向ひて左りハ刃ん込右ハ刃ん込向毛て山
大風呂ハ山二ッ五徳の爪を挾む小風呂毛て山一ッ五徳の向

向爪を三つにする山と刃ん込との間ハ切落し
大風呂にいふハ大尾張大阿弥陀堂の類之




見込

見付

風炉手前 水さし毛て釜環付より向へ喰違ひ横毛て乃
縁と風呂との間中へ建水ハ棗一ちんに並付ヶ後棗より
半分出して仕舞ひの節ハ茶筅茶碗中仕舞ひ棚把の中
かして飾もどる
風呂炭手前 香合客へ出して釜の下(モ)に寄出して棚つまで

棚と釜との間へ出し左手にて炭取と釜との間へ右乃手
にて出し客も亭主の出所へ戻し
風呂左手茶　中仕舞ひすし茶器の蓋ハ何れとも茶碗
の前へ置居茶ハ右の手杓も右の手風呂も右の手蓋は左を
右勝手の本返しべし
風呂下ヶ置　中置といふ事ハ左手にて用ひず　間中の中央に風呂置まで小板
竹台子長板なしかざれ小板を用るときハ水さし置風
呂と勝手との間へ押込客付の方へ筋違に置べし但し
小板の角と目通とすれべし先細水さしを用也水さしの
蓋を左の手にて勝手の方より水さしへとり次茶器茶
碗茶筅の如く蓋を水さしの胴（ドウ）へ置く中仕舞ひ



なし炭斗ハ小板の上へ置火箸をおろし帰り炭斗を棚ら
建水の向ふ

間中置

ふ　水サシ

ふたをおくハつまゝの通り小置

但し竹台子ハ真草のかざり好みで草とし風呂と客さしつけあり

此すじ茶器茶碗向ツラ

○相傳物之事

習ひ事十三ヶ條　茶通箱　唐物点　台天目
盆点　乱飾　真台子
右何れも相伝物ニて此書ニ不記但し習事ハ原叟時代より
始りて其後啐啄斎十三ヶ條ニて習事になりたり

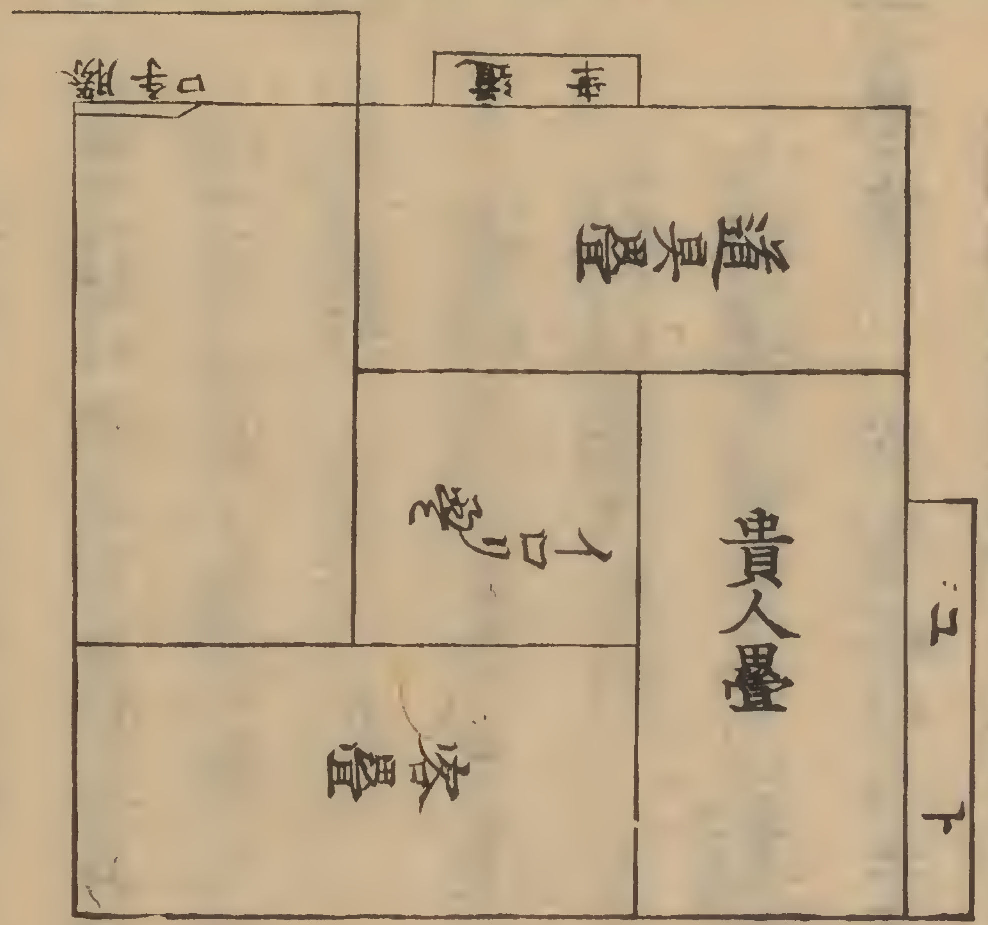
〇小座舗之說

四畳半ゟ下ハ小座敷と云四畳ゟ下ハ初後とも坐掃
となる四畳ゟ上ハ道具畳計坐掃となるなれとも
なし皆坐なるをすれとも紹鴎ハ誰人なるや
圍の始まりハ珠光東山殿正寝十八畳の間を四ッ一ト分
かこひたるが濫觴なり其後紹鴎ハ四畳半を好のミ又
四畳半有りなすなり道幸を好ミたる畳利 休
形なり

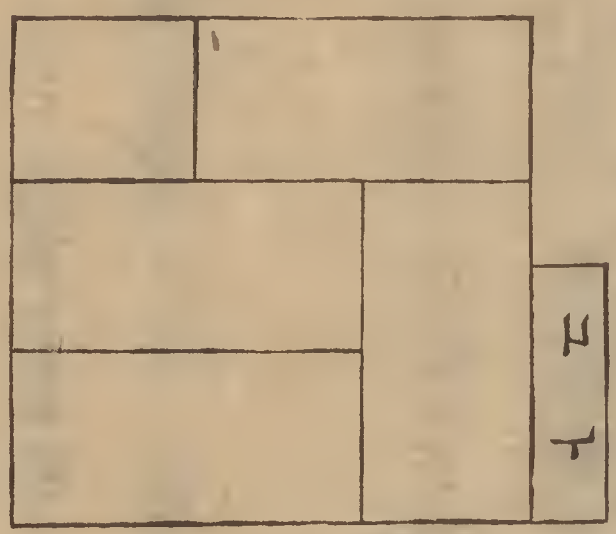
四畳半之名所　紹鴎好の四畳半ハ二枚障子にて左右ハ
マイラ戸にて張付なりしを利休居士塗立障子にして塗張
し窓を明られ口を付らるし



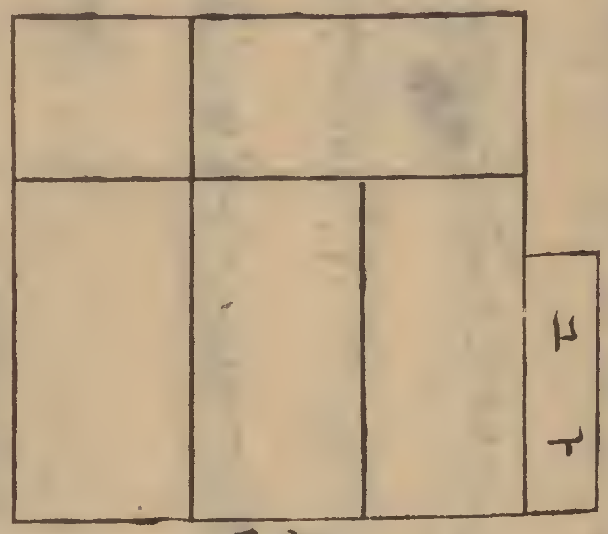





一間半二ツ割一ツハ道幸表へ戸ハ〆と引
一ツ尓ハ勝手口を鼓張の戸ハ裏に引
道幸の戸ハ竪の内引勝手口を鼓張
ハ竪の外へ引




フロノタヽミ




如心斎ゴノタヽミ

四畳半と引塞ぐ時ハ如此引塞ぐ
如心斎好ミなり

二疊臺目　少庵京師二條ニ住居の節初めて之を
中柱を入臺子の形を略しられ由又臺目とて丈也今
羽箒と云ふ也又云くハ真の行ならひく當時ハ通じて
利休形とす
右此席の事ハ少庵利休居士の上好なり此席なり
利休通口をはじめて好む是ハ太閤御招のためし
此通口を設けしハ躙(カラロ)口とす
一疊半　少庵好の二疊臺目と同じく作り自由なるとて
利休居士一疊半とこの世居士甚だ一条通薮屋町ニ住
居の節ハ四疊半と一疊半との小座敷あり一疊半ハ
床とはなしハ原叟好く今長者町天王寺屋の下屋敷



ニ作り右入床ありて疊ニ作り
○一説ニ一疊半ニ板床置宗旦古好とあり大徳寺中
芳春院ニ作り
二疊敷　利休好なれども樣子作りし由又向ふ小間中切
落し一疊半を古好む右此二疊ハ八寸の中板を入るハ
悴啄斎好く
二疊向板　件翁好
二疊中板　如心斎好
一尺四寸中板入炉切く右上ケ臺目
一疊半中板　一翁好
江岑一翁両人御膳の上好右風呂先又リ出し　板巾八寸

又中板入臺目切

三疊敷　江岑好臺床之

二疊臺目　織部好

二疊ハ四疊五疊六疊までも臺目切ハ皆織部より好始る

今二疊臺目藪内よりいふも織部好二疊向板入なれハ

啐啄斎ハ利休の一疊半と江岑の二疊と取合て啐

啄斎好なりと云

長四疊　元伯好

大徳寺見性庵より上ヶ臺目あり

不審庵　少庵本法寺前へ變宅の節利休居士の遺圖

によつて建しと云

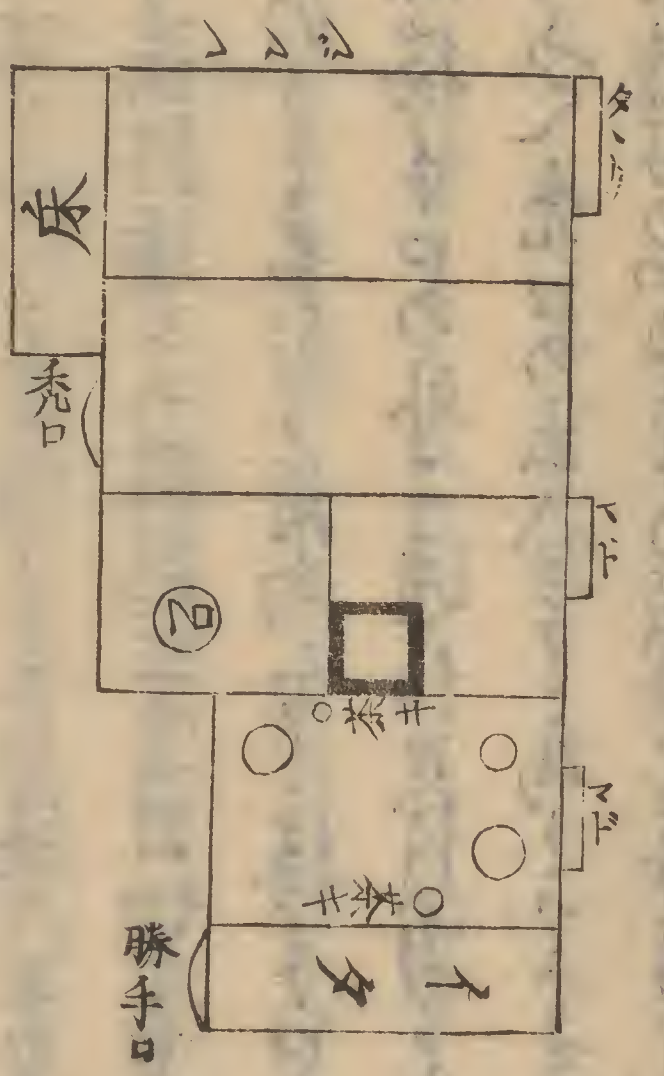


四疊臺目　織部好想しを四疊半二疊臺目一疊半以三

座敷ハ小ざしきの濫觴く其餘の事ハ八以三四疊敷より

變し来るなり

但し廣間ハ四疊半より上をいふなり



勝手口　ホタテ口と火燈口を勝手口ニ限る一火燈口スリ
マハシを勝手口と通ひ口と名付たり席よりて釣襖(ツリフスマ)
もありて古風ニは引違ひ襖ニて勝手口と通ひ口と兼
用すれもあり堺南宗寺利休好の二畳台目あり引違ひ
なりデクチはたらきまゝぬ席ニ多し

通口　又リマハシニ限る茶の湯乃菓子煙草盆通ひ
口より出入通口の濫觴ハ台目切ニて八点茶の節貴人の
茶ハ以ろ[illegible]用向など勝手口よりハ上雅さ多く
利休勝手口の外ニ通ひ口を明ちし之事故ナり是を禿口(カブロ)
口とハ云ふ禿口の出入とする為とハ云ふなり

窓　紹鴎好の四畳半の張壁を塗壁ニしてスリ残しの
窓と明るは居士より始るなり
定家卿の歌ニ
大空ハ窓めりけれ席まてくも
すきま次くす秋乃夜のはま

連子　突揚窓　北向道陳の好とも居士の好ともいふさ
[illegible]道陳ニハ上ケ窓[illegible]好とも
いへり突上ゲの木を萱(カヤ)ブキニ用ゆ長押とも杖の角外ニ
竹篩好のみしかし木よりの風ニ付よりさりて用ゆ
竹を長押とも夕ヽキ屋根ニ用ゆ目と茶ニして
作りさまにして用ゆ

クヾリ口　ゑらく大なるを妙喜庵よりて牧方の漁人乃

家の小さき戸口より出入するを見て居士始て好む

戸　夜咄ニは潜戸を入て見付のクヾリの上窓げん〳〵

障子より客を入る変ハ知られざるなし

障子　昔ハ下ざまの障子ハ竹を骨とせし故小障子ハ

作りて竹骨ニて用ゆ

竹障子の骨ハ横ハ皮付にて上之望ハ一本ならバ皮を見付

三本ハ中の皮を見付左右の二本ハ向ひ合せ二本とも

向ひ合にて右竹障子ハ小障子ニ限る本まて張る

ニて貴人方なり

中骨二本なれハ皮の方むき合ル

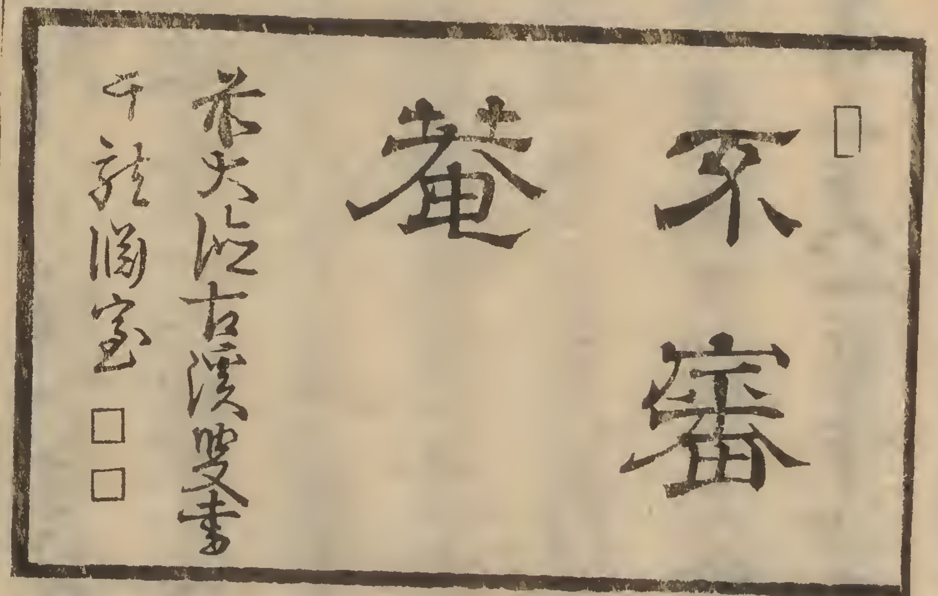
三本なれハ中骨皮目寄斗

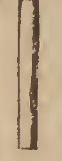


額

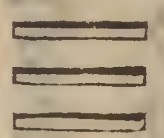
小座敷ニてハ不審庵形にて本とし杉の木まて古渓

和尚の書之彫て胡粉を入る



中骨一本なれハ皮目寄斗



横ハ何本にても皮目上まてある

杉板ハ元伯好縁を張して

彫込の色額ハ胡粉好と〳〵

彫額又ハ打付書扁額とも

用ゆ紙額ハ用ひず

花入釘　柱へ打ハ平座壁へハ丸座落し無之も有
利休外ハ元伯すゝの塗出し揚枝柱の釘ハ元伯以釘
と折釘といふハ悪し花釘といふべし
○床の吹貫の床客より見付よ成ハ内の方よ釘とも太鼓
舟と無る是ハ釘も花入も仙叟好之
○臺目床の釘ハ大抵床より三尺三寸程よ打柱落し無
より一尺一寸下ゲて打釣込床ハ床縁ゟ上ゲて打
なり大床ハ此割なり大抵釘ハ畳拵しより
低ハなし
床の蛭(ヒル)鏈　床の天井三ツ割一ツ分见込の方奥行なる
中鏈先ハ床ゟ向ひて花クサリと左の手つかひなる



すりにすべく　但し上坐床下坐床とも
稲妻釘　付書院嗅鐘銅羅(ドラ)カギ先を前へ向ケて打
釜釣ヒルカギ　炉よ向てクサリを右の手まそ無る様よ
カギ先を向ける中柱ある席ハ不用かる込よハ皮付拭
藤すそはるかざそそる横床よ打ハ元伯好く
天井　小座敷ハ網代(アジロ)蒲(カマ)長片(ノ子)此三通く板天井ハ
小座しきよ用ひる嵯峨(サガ)西芳寺ノ居士あたりの
三畳敷の縁乃上なる天井ある光悦大虚庵ハ八畳
の内ハ畳ハ去天井なり
カケ込　上の板をワリノ子平打ノ子横フキ板ハ宗全
好といづまも竹タルキなりス、竹幅八分の割をハサミ

有之是江岑好なり

簾(スダレ) 小坐しきハ皮付の葭(ヨシ)廣間ハ皮ムキの葭(ヨシ)白竹ハ
勿論伊豫(イヨ)竹ますもよし

襖(フスマ) いろ〳〵ハ出合なれ共千家ハ黒塗縁よかされ唐
紙張是桐(キリ)白張の袋ありハ引違ひよ限る吉佐の袋
張口抜ハ江岑好の三畳よ用ゆ原叟好之

引手 玉子ハ利休形 桐ハ原叟好 木瓜菊大徳寺
形之いづれも寄墨を大小あり竹ます宗旦の好を用ゆる
如心斎好茶華楽焼原叟好但し茶華吉佐なる
袋張ニ用ゆ

畳(タヽミ) 六尺三寸よかぎれ京間是厚サ一寸七分之大坂なる



一寸八分 六尺五寸是八 二寸二分なり

中板 大徳寺の行者(アンジャ)山田氏ハ元伯好の中板の席なる
是中板の始之 山田氏といふハ無盡油といふかうやくを製する家ありて大徳寺出入なり

二畳中板巾一尺四寸 如心斎好

一畳半中板巾八寸之

○床之部

利休形 二方天井まで塗廻し妙喜庵の床是之

板 カマチの入る床板床といふ利休形

踏込 カマチなしよ座と板と一枚なる床いふ少庵好

土 ム口床の通りなしを畳の床を土ずして塗其まゝと紙

洞(ホラ)
まて張之左官土斗へ元伯好ミ也ほく
利休形ハ墨目ニ小節中の洞也
○間口一尺アリ尺中の洞を原叟好龕破(カンワリ)床といふ

壁床　利休形之席中の掛物をかくる紙以ふ

○釣棚之部

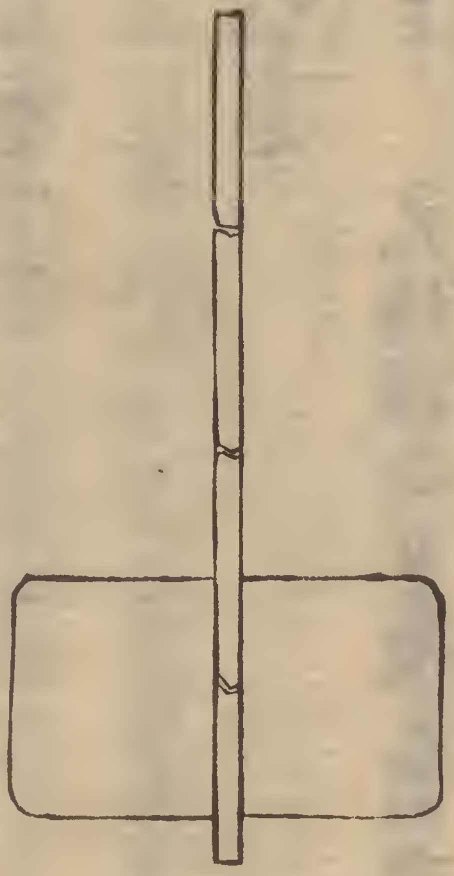
一重　利休形之桐ニて杉の釣木向切ニ中柱につるを
客付中柱ある記ハ勝手ニ但し枚もつり中柱につるか席
ニ無き枚ハ不用利休形の墨目ニて中柱ある記ハ勝手乃
方へ扱の一重棚を釣るむかし寸廣し

二重　利休形無うしハ吹貫より上ニりてとめる不審庵
三重墨目吹貫より下ニて釣る天井より八釣竹之棚



ちり棚ともかしの釣木也

釘箱棚　仙叟好枚ニて左勝手ニ好當時ハ右勝手ニても
用也書院則五重ニ及ニ行り今无表ニりも寸宗家ありり
はじめて用也



利休堂　仙叟好枚當時蛤棚といふ釣木杉之

炮烙棚　元伯好枚又隠の勝手ニ用也是濫觴也

料紙棚　了々斎好枚床框ニて用也釣木竹之

道幸　利休形杦後ニ開戸ニ打釘袋無ク釘ニ打ツ時義
より袋釘となる極老ハ後の開もなく水さし入水を加ふ板数
も無之其の上にも無之なり
○餝道幸ハ無ヌレにて茶無臺目ハコビにて茶の通り
吉野杦なり
水屋道幸　元伯好今日庵ニ用ゆ此筥一並棚なり後
ニ羽常無戸を入れ夏ハ戸をはづし簀戸無く二枚入ハ
桐の無糖無代用ゆ極老ハ水出無用ゆもあれ釣木向
無杦の末茶ハ此なり
○柱類
床柱　松　杦　檜　椎ニ ハ原叟好浪華海部屋二之無の席あり



はじめてより無て臺目床の柱ニ用ゆ
但し落入釘孔無入坐より上へ二るサ二尺六寸五分板
床あれバ二寸七分より三寸程上ニあり花柱釘ハ向掛より六
一二寸ころよりさがるよし
中柱　松　松の皮付　櫁コブシともいふ 大工方ニてハいまし入ハ虫喰木を用ゆ逆木
原叟時代よりユガミ柱代用ゆ
塗出し柱 俗ニヤウジ柱といふ 杦丸太　元伯好又隠の隅ニありいづれの席ニも
用ひられとも又隠の寸法を用ゆ又隠ハ座より天井まで二るサ
六尺ある寸の寸法を一尺一寸下ゲて落釘を 俗ニ折釘といふ
おく入其割まで天井のきハ下よりかまゆ次床下より五尺
四寸ニおくべし

捨柱　斬(ノキ)の釘を深くしを撰を用ゆれば端の些さまりの
あれ利ずて立る柱ハ杉丸太栗のナグリ
間柱　塗残し窓の外ツラへ添る竹之窓の大小によりて八寸
柱者乃差を打出し間柱とハ元来壁の助となり竹を白
竹まで先四寸出り但し間柱ハ時ハ簾かけ釘寸法
おし長し　別に出に

○庭之部

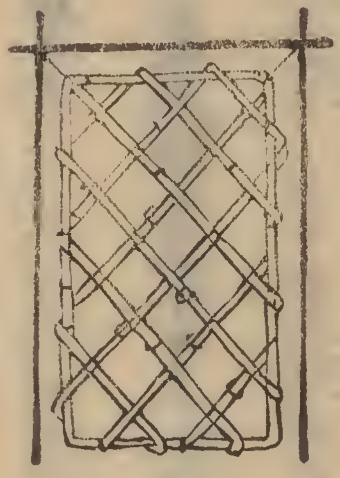
露地口（ロじの文字いろいろ有れども此文字よろし）　外戸又ハ引戸を用ゆ
待合腰掛　外露地と待合といひ内露地と腰掛といふ
堂腰掛　利休形外露地に有りて是をクレと用ゆ元来辻堂
かさぶりたる板堂腰掛といふ原叟好の牛部屋ハ堂腰掛へ
中クヾりを引付てあり待合腰掛堂腰掛ともに田堂
烟草(タバコ)盆ハ末席の方に並べ烟草盆ハ煙管(キセル)を客
の方へ向く様に並置なり

萱(カヤ)門　利休形萱ブキ家根裏よし　ず桧の堀込柱戸より
上に松の皮付二三本入竪く下ケツリ木のヌメシキ一枚の
大開戸の内有り小クヾリ戸有り鉄の横関要を手懸
まりとめれ

中クヾり　織部伏見の屋敷にて武用のためにはじめて好
まれしよし杉の堀込柱有り壁を付て二じり口より大
好み戸を開ゆ板屋根表方へさし出ろし戸尻に塗
残し長窓障子あいし簾ばかりなり

角戸　猿戸ともいふ　利休形大小有り塀あきの栗のナグリ柱乃
根ニ戸有り
揚簀戸（アゲスド）　半蔀（ハジトミ）ともいふ　好ミ掛ニ有る次第ニしたり有る紙仮（カリ）用ゆ
小坐敷二ニ有りて路（ミチ）二ツニ分れ露地などに用也揚簀戸
おりて有ればかるくの茶代わりあり此簀戸用る附き
客なり家ニ揚げ又左右に附ても用也

半蔀（ハシトミ）之図



以図少し筋違ひにてつる處上より二八分　式
用ひ飛石のはづしニ実張る事



梅軒門　柱の掘込柱杉皮屋根竹簀戸の内ひらき也梁
廣庭の見切ニ用也何ニ而も作りてよれ客をむかへるも
くるしからず次
京クヾリ　柱の大引戸ニ小間の戸有り分露地ニ用也
土橋（ドバシ）　千家火家の庭乃空堀（カラホリ）ニかけ渡し橋の端ニ半蔀
有り橋ハ板として紀出をかけ縁出と申也竹之好なし
むかしからあるもの
空堀（カラ）　好なし　千家火家の庭ニ有り内ニ庵有その
植石有り塀乃きはニ手水鉢をおき下水無き堀の内へ
おとし候
石手水鉢　杓の柄長柄　水溜さし渡し七寸深サ六寸径巻

石の大小ニもよられ利休所持の四方佛ノ手水鉢ハ今清水
寺ニありて梟(フクロウ)の水といふ何者か仕かへん甚よく角
ある手水鉢を亭主覧まて水吹上られ
手水桶　蓋　椹(サワラ)木の桶松の蓋籐杉不浄水ノ入も清浄
水ニも杓とも用也
不浄(フジヤウ)葉(ヤク)罐(クハン)　二重露地の節ニハ是葉罐を用也廣露
地ハ是桶を用也一重露地ハ廣き節ニかゝりにばニ水鉢
ばかりまて不浄水ならぬ不浄の手代浄くとるハ
まづ杉の端代持拵たる手代あらひ其よりを杉乃
中程代持てかくしと洗ひ後ニ口をすゝぐ
石燈籠　蓋　油盞　古寺古社ニありしを用也其外名物



ありし蓋ハ杉板ニ半月のすかし　但しハ日月あり障子を
十文字明ケ掛ほまを杓を用也利休形
油盞ハ了く欠好孫助作赤
木燈籠　輪　油盞　今是代用也
利休形障子と三日月とむかひ満
月と半月と向ふ油盞を居る輪是代なり
仙叟好ハ満月が角有りかれなり　右仙叟好満月と障子と対をなすとも当流ニハ不用
金燈籠　利休形葉のすかし鐶くづしの二つあり
甚餘ニ古寺古社ニありしをうつびたるを用也今千家の
利休堂ニあり
燈籠臺　利休形栗のナグリ木の蝋手ニるサ一尺八寸
江岑好の石乃臺ありし一尺六すく蝋手すり法ニすゝるきハ

蹲手燈籠の座へ十文字入形が好り　江岑好石甚云
同様ニ成るゝ

白川石なり

井戸　側ハ栗のナグリ利休形也　但し世間ニ原叟なれとも云
○石ハ古き作仮用也　石ハ原叟好とは俵へども むかしより有る也
クル巻釣瓶　クル巻丸さし渡し八寸クル巻釣(ツリ)ハ
栗のナグリ柱一本又二本ニ志たるもあり
釣瓶　金木とも好なし　好り釣瓶ハ利休形木の角
まて蕨縄(ワラビナワ)車の方金釣瓶好し

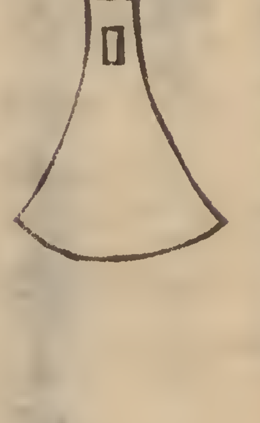
塵穴　丸　角　丸ハ九寸七寸　角ハ九一尺二寸四方なし
庭の大小ニ応じ縁ハ八分地より二分上ヶる平とツクイ
無き縁なし
雪(セツ)隠(イン)　露地口より外ニあるが下腹　大便を通する雪隠也　露地口乃
内ニあるがクレ板雪隠　クレ板八枚セツイしの廣サ内四尺弐八 外四尺是より昔は八座の術ニよるべし
クレ板ハ枚の内二枚切ヌキ左右ニハ枚之内露地ニ
砂雪隠なり
砂雪隠　堀込柱内ニ踏石丸き塵穴蕨箒鑷杖箒
子あり　御影(カゲ)石ゝ白川石ゝの屑を表中と隅ニ盛る
入口の石と戸下の石とを以て両方と踏石とを以て向ふ小便
返しを後とウラとなし　此石ゝの石の肩より砂ほ

掻込て縁手の方に積む 砂雪隠にある庭にハ砂故蕨
箒不用なり
飛石 一番石ハ石の上にてにじりあがる坐敷の敷居へひざの
かゝれるほどよしとす 高さなり六寸明き ○二番石の
高サハ一番石と二番とのあひく一番と二番との明き
手履を揃へ入て程次第しるし 此明きなり○三
番石より高サ二寸
但し二番石ハ定めたるサ二寸く二番で居申すり
一と二と見合て其後に二番を定むべく
捨石 類さまざま石ハ用也数極まりなし 庭の様体に
よるなり



鬼瓦 江岑好ノシカウ形赤く千家上檀の間乃屋
根棟にありし後宗入に命(メイ)じ写させとりおかれしが
大風の節松吹折れ砕(クダケ)たり 夫より入に命じて造
らしむ是も大火の節焼失此ノシカウ形ハ今に所持之
○庭廻小道具之部
青箒 名物の茶会なりとも古き青箒用ひ四五枚
さしおきなり 飾箒二品 待ハ青箒 待合に用也
蕨(ワラビ)箒(ホウキ) 但し炉風炉共用なり
かぶろ箒二品あれど小坐敷に用也 それ雪隠
にある庭にハ砂雪隠に限る
塵箸 禅家にて箒子と云

鐶杖　御堂跡の石屑拭かくさまつれ候之利休と仙叟と好ニ有り



露地行燈　桧木地溜塗蓋も塗待合上客の方より歩く風情ある事を辞て立かゝる成べし但し足を停て清る風情ありとなりハ有る事を知れあり油盞臺とも云焼之杖楊枝何れも利休形

但し露地夏ハ生炭より八黒モジ
庭より八杖楊枝へとちるべし

円座(エンザ)　利休形竹の皮纔波円座形用てもよし

笠　利休形竹の皮熊野笠桧網代編用てもよし

草履(ソウリ)　むりし八ひとへありしが利休竹の皮乃裏付とちらむ足雪踏の始りあり裏に云る代すべるく雪踏と唱ルよし雪をちらぐ為之

下駄　利休形杖よ竹の皮緒ハナヲく

杖　利休形白竹の上成竹乃皮すて包て継节すて置く

湯桶(ユタル)　利休形杖曲物割ふたニ有足寒中後座に用也用ひざれハ亭主の卑下(ヒゲ)へ初入の手水ハ客の名残後入ある合後出入足拭ひ成まぐ出入湯桶を出ス他亭ニ手水鉢へ出すりし入れくあり初座より出すしてもよし

手桶　杖の桶ハ桧の額ある桶を清る桶杖ともまよ了く斎好あり

水漉　利休形桧の曲高方へ二本角(ツノ)あり
箒懸竹釘　大工方ハ大面と云利斎ハ丸高根とも用ゆ
長サ一寸二分杉釘も同寸利休形
笠懸竹釘　利休形長サ一寸三分
刀懸ケ　杉の組刀懸ケハ利休形竹組ハ元伯好又隠よ
用ゆ竹のクリカタ五櫻懸ケハ如心斎好竹よ桐紋ウエ
それハ元伯好大徳寺芳春庵よあり

○水遣之部

水遣　むかしハなし縁(エン)側(ガワ)なとにて仕廻し之不審庵ハ
水屋乃始りなり不審庵敷ヌメ棚簀(ス)棚二重棚何れ
も板なり又ヌメ棚簀棚とも一方袋有りはゞ今の家
まきハ両方とも袋ニ付長棚ハ廣間ニ有ル水指よ
用ゆるなり
門開き物入　啐啄斎好塗縁モミ紙表黄黒の半月
出力子の打懸ケ
水桶　利休形杉よ桧の割蓋
水壺　和漢宜しき品を仮用ゆ
揺箆　水漉　二品とも杉曲物
三ッ入茶通箱　桐蓋のシヤクリ二方よあるハ利休形
四方よあるハ元伯好
茶巾洗　利休形杉の曲金ハ千家ニ有精砂張写しなり
焼物染付等も用ゆ

茶罐　和漢とも形宜敷古き物を用也緩急の茶罐
も利休形よろしけれバ是堅茶罐代後用ひらるゝ之
片口　大中小利休形之中無き裏よ用也大小ハ表よ
用也釜へ水を加ふるときハ小なるフタある代用ひらる
ハ蓋なき代用也

大口　無形し元来水差の具なるを釜仕舞の節り
釜へ水代入まき水さし入水代入形を茶道之水指よ用
ゆるハ如何の訣なり始まるむかし紹鴎切之也
釜居　利休形両面粒



釜洗　撥ハリカ子巻
拭巾　麻布長サ一尺二寸横布巾端又イ
雑巾　寸法同様木綿なり
手拭　晒木綿長サ一尺五寸端又イ乳上より二寸下ゲ
右三品の寸法ハ流儀よりて定まる所まちまちにて録ざし
帛紗　紫　茶　紅　利休形なり　今黄色なるハ利休茶といふ
相傳物ハ用也啐啄訣日本新織蜀羽を古法 シャウハ蜀羽を
純子風津の類ハ出し帛紗よ用也
茶巾　金指一尺よ五寸大の方ハ一尺よ五寸よ五分之
むかしハ近江上布を用也今ハ奈良晒布を用也
茶筅　油竹のを用也白竹ハ古竹を用ひけれバ

○寳来　八十本立　○数穂　六十九本
○中穂　五十八本　○荒穂　四十七本
是を算由れハ四五六七八九と算由るなり
四十七本
五十八本
六十九本
寳来のミ八十本なり
炭斗　利休形ハ桑元来掛手道具之老人作者
無之平生ニ持くもよろし○ツカミ結　ツボ羽十又枚
左右なしを
ツボ羽といふ　いづれの掛手ニても用由るなり
○板釜敷　利休形釜敷ニあれども角違ひニ用也



○炭斗の内羽根無之釜ヲ渋ニ釜敷ハおかへし風呂の時ハ
鉄張火箸炉ハ桑柄
茶ハキ箒　利休形桐の三重足サン茶の華紐門ニ茶合と二重
茶漏斗と銀の茶杓と代入れし茶合ハ挽茶一人前九
分の積りにして二人前二匁七分入るゝ故之茶漏斗大ハ
撥小無之挽茶杓ハ銀ニして桑柄茶壺上ゲ茶籠フタ
華紐無之宗全好なり
茶篩　利休形撥木地
挽溜　むかしハ唐物大海を用ひきれども土の物にて無之
茶入と挽じやちんと利休大茶桶一対ニ薬茶代にて
其後元伯極結の字を甲ニして朱書して濃茶をのみ川

濃茶入甲よ極の字作り薄茶入
甲よ結の字作り今千家よ无し

掻溜茶桶名　桐茶筅フタ元伯好　桐サン盆ハ原叟好

桐木地蓋溜茶筅フタなし織部好

茶臼　挽木名　和漢ともに用ゆ挽木名を桐にし込ミ

蓋なし

半田　和泉半田焼をいふ其後半田とて

むかしハ大炮烙を用ゆ是ハ底取炮烙とて長二郎

なげに大炮烙作りを皆底取なりいろいろに用ゆ半田ハ

二つとも素焼なり茶わりるハ好みて物に作る須

小の方茶わり風炉の半田なり善五郎作なり

全入ても新好なり



長火箸　炉ハ竹の皮紐巻風炉ハ鉄の鉄張

底取　炉風炉とも竹の皮巻

火吹竹　利休形サビ竹節二つ

臺十能　利休形鉄臺柄棗

炭切溜　棧十文字足

炭箸　杉の八角

炭割　鉄のナタ棧の柄

掃込　小寄ハ右の片羽鴫をモロ羽南蛮とも客の前

まて用ゆ但し小寄ハ志人僧侶の者鴫ハ上下共用

の者よろし

座掃　鴫の片羽鴇は物なり客の前まては不用中立て用ゆ

塵取　利休形相裏ニ卅の八ミバミ入れ

無燒臺　利休形楽の二枚ヒ蓋小の方を用也熱じて燒火ハ湯ニ楊枝無堂の内をクロモじ庵を様と乃んもべし

○棚物之部

臺子　真大小　真ハ臺子唐物ニ倣し　千家ニ持を盆阿弥の作大の方を當時写し　無紀小の方ハ利休時代より家ハ作られしが中比より侍ハくぶるはし是ハ紹仏新再興ス

及臺子　唐及斎門の形なりといへ共もいまだ及第の名は作文をかく臺子なりしんる



竹臺子　珠光好本斎ハ鷗池栄三郎ニ持之やり鐶（カンナ）柱を傘の柄竹を用也　下の板無付ニハミバミ入る表流ニ用也　表流ニハ無ミバミなし

爪紅臺子　元来唐物写し其漆ハケメ付ると云を当様ハ家ニ持ハ刷毛目なし　紹鷗門人東宗甫ニ授けるなり　利休百會ニ宗甫棚と有るハ爪紅の事なり　但し宗甫とハ堺の住人紹鷗門人なり

高麗臺子　元来高麗物写しなりと元伯より持来しハ浪華天王寺屋又玄ニ持元伯出付けり後一家ニして之詳しけり

業臺子　原叟好爪紅の通りを業にて写ス

長板　真大小淄　真の大無利休形小ハ如心斎淄ハ宗全之

大一枚松の木地といへども寒ハ桧木地之
円桐大小 円一閑大小 桐大小とも隠流好裏まで八元伯
好といひ伝へて桐にハこバミ入たるハ小の方なり紀州にて
一閑棗まで好む一閑張ハ大小とも元伯好なり
紹鴎棚 古名紹鴎袋棚といふ是今の紹鴎棚の事也
紹鴎所持の棚をヤリカンナの木地引遠の模大猷モヘギ
地古今袋小縁金地古今袋南蛮サハリ水指溜今嗚池
栄三郎所持之○鴎の歌に
我名をハ大黒庵といふなれバ
好くろ棚に秘支とぞ云なり
袋棚 利休形棗の志野棚を桐にて写したる物也



丸卓 桐ハ利休形木地松木溜ハ啐啄斎好之
四方棚 角のゆるき利休形むかしハ利休水指ともいひ
又半臺子ともいふ角の丸きハ江岑好之
旅簞笥 利休形一説に小田原陣中にて好まれし由
旅簞笥といふ
三木町棚 江岑紀州三木町滞留中若党の作なり
桧板杉(モミ)の寄せ木之ツマミ竹江岑伝来の棚ハ溜池
善右衛門所持桐ハ原叟ツマミ棗
二る箱卓 宗全好一閑未塗ハ好なりし二る篭臺子状
半分に切たる物なり未塗ハ海松屋にて造らしむ
棗の小卓 仙叟床に用ゆる卓に好まる蔵ハカマゴミ

の風炉にフクベの細口の茶入抔取合して点茶棚に用ゆるなり
如心斎好之
三重棚 一閑 桐 桑 一閑張宗全好 桐ハ原叟好 桑ハ如心斎好之
○七事 別ニ七事の書あり故ニ略す
七事の内 回茶 回炭 茶カブキの三ヶ条ハむかしより
行はれける者也 其余の四ヶ条ハ如心斎新に製して定出
来の後乃碧巌（ヘキガン）の語に七事随身といふ事のあるをとりて
茶人の役芽より工夫を先とし一二三の式を製し七ヶ条
の数に合す
花月
始ハ茶名といふ四季の花鳥の札まてこそ客数定む
春ハ梅に雉子夏ハ桐に鸞秋ハ菊に鶺冬ハ松に鶴の



札を用ひたりしが後四季通用に花月に定む此ハ花
花月の二字を書しを花鳥の札に換ふ
旦座 趙州の語に旦坐喫茶去の語をかり用也
茶カブキ 仮名を書べし 大折居ハ五寸四方也 紙
ハ金砂子小折居ハ表浅黄生鹿裏金布 目大サ一
寸五分四方小ハ花月に用也
一二三 月ハ上の上中下の上中下花ハ下の
上中下客の札ハ亭主に踏粗ひつる札目の数に用ゆれよ
用也 硯蓋ハ十種香箱のフタをかり用也
○茶師 并茶名
上林ハ元丹波より宇治へ来る人也 公儀の御用を勤

むろ代御袋茶師と云次の御用を勤るを御通茶師
といふ其次を次茶師といふ其外ハ朱幡大風等之

茶名

初昔ハ慶長の比より始るむかしハ白といふ製まて有之が
中比よりきといふ製を為りしを慶長の比むかしの白乃製
を定め給ふを当関白の書を知りよる八上林の後室のさ旅
し後婆ゝ昔と御銘し給へり 祖母昔ともいふ 但し白昔といふ六
畑の名といへり

七園の歌 ○森○祝○う文字○川下○奥の山○旭の森○琵琶とひく之
○茶の 皇朝に伝へりし始ハ栄西禅師入宋し茶の種を
とり来り筑前脊振山に植へ其種を明恵上人へ贈りて
栂の尾に植し世に是より又宇治へ移し是よりして栂の尾



の茶を本乃茶といひ宇治の茶を非の茶といふ

○薄茶

極揃 別儀 極揃 別儀揃 宇治の茶園此四名のかぎりなし

茶一斤 二百目之

○濃茶一袋ニ二十目入 昔と云ハ八十文入 小昔と云ハ五文目入
昔の並服 下三匁九分 中五匁七厘 昔といふ名より八東線一斤の礼之

別儀揃 一斤ニ付 十三匁
極揃 同 廿六匁
別儀 同 五十二匁
極揃 同 七十八匁

通例の濃茶此並服と同じ綾象ハ三割増

宇治いづれの家までも此定りあり二十日代四十日代と
いふ八名の茶といひて定並にいふれば
○初昔 後昔ハ壺の大小にかゝはらず黄金一枚
此茶壺外にて是なし拠なく不事よ修く譲り受
取付一袋金百疋 半袋南鐐一片往の礼之

御物茶師

上林六郎 宇治

○初昔 ○後昔 ○祖母御茶 ○好の白 ○祝の白昔
○若森昔 ○鷹ノ爪昔 ○千摘昔

同 又玄清

○初昔 ○後昔 ○いノ昔 ○初鷹昔 ○鱗形

○唐金 ○白世らし ○大昔 ○判むらし

同 味卜

○初昔 ○後昔 ○祖母御茶昔 ○一文字昔 ○大祝白昔
○初鷹爪 ○鷹爪 ○大昔 ○むらし ○市昔

同 春松

○初昔 ○後昔 ○祖母御茶 ○白津り紫昔 ○いノ昔
○大祝昔 ○戸の内昔 ○白昔 ○大むらし

同 平入

○初昔 ○後昔 ○一文字昔 ○う文字 ○鷹爪
○千鳥昔 ○初鷹爪 ○鎌形 ○大昔 ○祝昔

酒多宗有

○初昔 ○後昔 ○一文字 ○花の森 ○後くのむかし
○木の森 ○御理り ○白昔 ○大むかし ○大森

尾崎有庵

○初昔 ○後昔 ○いノ昔 ○ろノむかし ○初鷹爪
○う文字 ○宇橋 ○綾ノ森昔 ○大祝昔 ○大森

星野宗以

○初むかし ○後昔 ○好ノ白 ○う文字
○祝 ○小森

上林三入

○初昔 ○後昔 ○一ノ白 ○花ノ白 ○九ノ白
○小白 ○白鷹爪 ○大白



堀　真翔

○初昔 ○後昔 ○綾ノ森白 ○小林の白 ○若森
○う文字白 ○戸の内森 ○祝の森 ○小鷹爪

長茶宗味

○初昔 ○後昔 ○一文字 ○初鷹爪 ○鏡取
○唐全 ○白むかし

辻　善徳

○初昔 ○後昔 ○いノ秋鷹爪 ○楪(ユヅリ)葉の森 ○岩昔
○小鷹爪 ○大鷹爪 ○白昔 ○大昔

右ハ御物茶師之分

御袋茶師

上林牛加
○初昔 ○後昔 ○一ノ白 ○秋鷹爪 ○早摘昔

八島徳庵
○初昔 ○後昔 ○鷹爪 ○小櫻 ○初鷹爪
○唐金 ○祝ノ白

祝 甚去涛
○初昔 ○後昔 ○いノ昔 ○若森ノ白○う文字鷹
○戸の内白 ○初鷹爪 ○鷹爪 ○錦脱 ○祝ノ白昔

堀 正法
○祝昔 ○後昔 ○う文字 ○一文字 ○戸

○大祝 ○小松の森



佐聖道意
○初昔 ○後昔 ○初鷹爪 ○大鷹爪 ○白昔
○いノ白 ○大昔 ○祝昔

木村宗二
○初昔 ○後昔 ○四つ紫白 ○大昔 ○初鷹爪
○大祝の森 ○錦脱

竹田紹貞
○初昔 ○後昔 ○初鷹 ○綾ノ森 ○千鷹森
○白祝昔

上林道庵
○初昔 ○後昔 ○曙 ○祝 ○初森 ○玉札

○はなし　○梅かゝ　○志ら雪　○柳

竹田道雲

○初昔　○後昔　○いノ昔　○一文字森　○う文字

○好ノ白　○若菜　○千鳥　○小楢　○宇橋昔　○大綾

右ハ御袋茶師之分

御通茶師

片岡道二　宇治

○初昔　○後昔　○二ノ森　○初鷲飛　○唐金

○いノ白　○ろノ森　○白昔　○大昔

宮村權右吏

○初昔　○後昔　○旭ノ森　○初鷲飛　○いノ昔　○白昔



西村了以

○初昔　○後昔　○一文字　○初鷲　○う文字森

○綾大白　○楢ノ白

竹田紹清

○初昔　○後昔　○綾ノ森白　○若ノ森白　○初楢

○小楢　○千鳥　○鉄瓶　○若ノ昔　○綾の白昔

河村宗順

○初昔　○後昔　○いノ白　○さくら　○う文字小森

○綾の白せうし

橋本玄哥

○初昔　○後昔　○若ノ森森　○旭ノ初鷲飛　○う文字森

○花の白 ○川下ノ白 ○琵琶の白 ○奥の山

馬場宗園

○初昔 ○後昔 ○う文字 ○初鷹爪 ○房今昔

○戸の内昔 ○二の昔

森本道加

○初昔 ○後昔 ○う文字初白 ○いノ昔

○花後昔 ○一文字昔 ○鷹爪昔 ○森の白

長茶清右衛

○初昔 ○後昔 ○いノ白 ○う文字 ○若森ノ白

○餅形 ○内屋の白 ○白昔 ○大昔

喜多立玄

○初昔 ○後昔 ○一文字の白 ○柳ノ白 ○いノ鷹

○上林昔 ○若ノ森白

門喜八

○初昔 ○後昔 ○初ノ白 ○いノ白 ○大白

○千香 ○花ノ白

松原宗左衛

○初昔 ○後むかし ○若むかし ○一文字白

○花ノ昔 ○老ノ白

菱木宗見

○初昔 ○後昔 ○いノ昔 ○一文字初白 ○若ノ森白

○由づり葉 ○白むかし

滿田宗恵
○初昔　○後昔　○二文字白　○大祝　○西ばうき白
○若森白　○宗猫白
長田七郎右衛門
○初昔　○後昔
小山猪右衛門
吉田六右衛門
加川太良右衛門
藤科金兵衛
宗林六之丞　大鳳寺
○初昔　○後昔　○桃ノ白　○千代白　○いノ昔　○初夜乃白



○森昔　○蒔芽昔　○内屋ノ白
梅林宗雪
○初むかし　○後昔
泰江宗左衛門
○古川昔　○後むかし
右者御通茶師之分
外茶師
宇治
滿田道林　尾崎彦六　竹林紹二
川崎徳意　佐藤勘六　中村弥右衛門
大鳳寺

山上善右丈　同　幸二　竹林六之助

河下彦八郎　梅林源治

木津

猪家庄右衛門　松尾忠助　同　治右衛門

同　喜平治　同　長悦

榛島

辻　千太郎

此外茶師多くありといづれも茶名妄しく志るさば畧之

茶道筌蹄巻之一　終